

【テーマ】

- 男性が女性に声をかける歌の話―その2
↳互いに声をかけ合う問答歌



公民館だより

2018年6月1日(金)

番外編・第2号

二名公民館

館長 上田善紀・発行

■ 万葉集の中でも、最も多くの作品を占めるのが「愛の歌」相聞歌です。だれかをいとおしく思う気持ちは、1300年前も現代も変わりません。「相聞」とは、「お互いの様子をたずね合う」という意味です。夫婦や恋人同士に限らず、親子、兄弟姉妹、友人など親しいものの中で、その消息をたずねあうのです。

相聞歌には、問答歌といわれるカテゴリーも多く含まれています。いわば、恋愛の歌の「掛け合い」です。男女が恋歌を交わして結婚相手を決める、いわゆる「歌垣」で交わし合う歌も多くあります。

奈良時代、「庶民の台所」ともいえる市には、庶民を始め、役人、農民などさまざまな階級の人々が多く集まってきました。もちろん、食料品、日用品などが売り買い（または、物々交換）している）マーケットだったのですが、実は、当時の市では、男女の出会いの場でもあったようです。男性が女性に声をかけ、互いの思いが一致すればカッブルになったというのです。ただし、ただしです。「私とおつきあいしてくれませんか？」なんていう会話ではありません。歌（＝和歌）で表現するのです。私たちの先祖は、なんて文化水準の高い民族であったのでしょうか。AIロボットなどの開発で、世界的にも文明が発達したわが国ですが、精神的な文化水準は、1300年前の方が高かったんじゃないかと、私は思っています。いずれにしても、男女が歌で交流し合う場所のことを「歌垣」といいます。

紫は 灰さすものそ 海石榴市の 八十の衢に 逢へる児や誰

作者未詳 卷一十二―三二〇一

ひ 紫色は灰汁を加えるものよ。灰にする椿の、海石榴市の八十の衢で逢ったあなたはどなたですか。

たらちねの 母が呼ぶ名を 申さめど 道行き人を 誰と知りてか

作者未詳 卷十二―三二〇二

ひ お母さんの言葉には言霊がこもっています。その名を申し上げてもよいのですけれど、道で行きずりのあなたの名前も知らないで、母の呼ぶ大事な名をどうして申し上げられましょう。

〔解説〕… 海石榴市（桜井市金屋あたり、三輪山付近）での問答歌です。奈良時代、このあたりでは市が開かれており、椿が植えてあったことから「海石榴市」とその名が生まれました。ただし、常設の公設市場ではなく、不定期に開かれていた市、いわゆる格式のある市ではなかったようですが…。

「逢へる児や誰（今、逢ったあなたはだれ？）」と、男が聞いています。求婚を意味しているのでしたね。これに女性が応じれば「ヨバイ」が始まります。「ヨバイ」、すなわち男性が夜更けにその女性宅を訪問するのです。これを何度か回を重ねて、やがて女性の親に認めてもらえることとなります。これを「妻問い婚」といいます。妻の家を訪れて逢瀬を重ねる結婚の形態だからです。

しかし、この女性は「誰と知りてか（あなたが誰なのかわからない）」にもかかわらず、「道行き人（行きずりの人）」に自分の名前をいうわけにはいきませぬーと知っているのです。早い話が「まずは、あんたから名乗りなさいよ。」ということですよ。「母が呼ぶ名を」とありますね。古代においては、母と子は緊密な関係があったことを物語っています。

ただ、男の立場に立つてこの男を弁護すると、自分を「灰」だといっており、相手の女性を「紫」に例えています。「紫」は、当時は最高の格式ある色を意味していました。聖徳太子が制定した「冠位十二階」でも「紫・青・赤・黄・白・黒」の順があり、紫が最上位の色とされています。いまでも、徳が高い僧侶の袈裟は紫色ですね。相手の女性を紫に例えている、最高のおせじをいっているのです。それなのに、いとも簡単に断っているんですね。

ただし、どうもこの歌は真剣に女性をくどいているのではなく、結構、相手の女性との掛け合いを楽しんでいるような感じがします。古代の人々は、歌を詠むことでコミュニケーションを楽しんでいたのです。作者はわかりませんが、一般庶民でしょう、きつと。現代人よりも豊かな精神をもった人々であったと容易に想像できますね。

＊少しスペースが余りましたので、ついでにもう一首

西の市に ただ独り出でて 眼並はず 買ひにし絹の 商じこりかも

作者不明 卷七―二二六四

西市に一人でやって来て、見比もせず買った絹は失敗だったなあ。

〔解説〕… 平城京には西市と東市という大きな市がありました。東市は、辰市小学校付近、西市は九条公園（大和郡山市九条町）あたりに設けられていました。地方からの単身赴任者でしょうか。自分が安易に買ってしまった絹織物があとと見劣りをして後悔しているというのです。

ただ、この歌には別の意味が隠されているようです。安易に声をかけた女性が・・・であったためにゲンメツしたよという意味にもとれます。この歌でじやれ話を仲間と笑いながらしていたのでしょうか。楽しいではありませんか。